

ホトトギス

昭和二十三年三月二十八日出版
今期二年十一月一日発行
第四百二十三号
第十一号

ホトトギス

十一月号



風雅の小筥〔三十四〕

廣太郎

この稿を認めている令和二年八月二十四日時点でも新型コロナウイルスの感染者は増え続けており、なかなか先が見えない状態であるが、句会等は少しづつ少人数で開催されつつあるようだ。以前にもご紹介したネット句会等も定着してきて、徐々に俳句の世界も様変わりするのもかも知れない。ホトトギスも今までのように雑誌という形が続けられる為には、やはり読者数がこのままでは難しいのかも知れない。

このコーナー「十九」で申し上げたが、その時は「イナバウア」や「千の風」といった、当時の流行語についてコメントした。そんな中ここ数カ月の皆様の御投句では何といても「コロナ禍」という言葉を句に入れる例が圧倒的に多いだろう。勿論この言葉を句に入れてはいけない、という事は無く、実際最近の某新聞の俳壇でこの言葉の入った句が一人の伝統俳句系の選者の選にも入っていた。あくまでも句の出来によって名句が生れる可能性は否定出来ないが、これらの句が将来佳句として残るかどうかは歴史に委ねなければならぬだろう。

すっかり調べたわけではないが、約百年前に、今回のウィルスよりも、現時点では被害が大きかった所謂「スペイン風邪」であるが、当時のホトトギス大正八年前後になるが、その時の虚子選の雑詠をざっと繙いたが、句の中に「スペイン風邪」の言葉は見つける事が出来なかった。当時の虚子選は厳選であったので、投句の中にはこの言葉があったのかも知れないが、少し考えさせられた。

旬日記 汀子

令和二年十一月三日 下萌旬会

馴染まざる季節の心冬に入る
あの旅もこの旅も過去石路の花
束をへだつ玻璃とは頼りなく
整理して又整理して冬に入る
〔田鶴〕六百号祝
高く舞ふ鶴に従ふ空深し

十一月四日 ロイヤル俳壇

冬芽には秘めし力といへるもの
山眠りゆくとして摩耶も六甲も
この晴を心に栞る冬の朝
山眠り我は活動の朝となる
十一月八日 工業倶楽部

引きつづき今日の予報も冬日和
眠る山とて人声のなつかしく
十一月九日 関西ホトギス同人会

快晴といふたまものに寒さなく
病む友の消息いかに古都の冬
十一月十日 関西ホトギス俳句大会
冬紅葉よりはじまりて光る庭
邂逅の生徒なつかし古都の冬
十一月十一日 投稿〔俳壇〕

初春を寿ぐ心生れつつ
さまざまな心抱きて年迎ふ
世界より客人迎ふ年迎ふ
少しある新春を寿げり
十一月十二日 〔俳句四季〕掲載
忘れぬし年改るめりたさよ
寒さまた心引締めをりたさよ
今日よりも明日年迎ふ心あり
十一月十二日 大阪倶楽部

気を許す外出小春でありしこと
一応は掃きし狭庭の落葉かな
旅の荷の重し冬めく日となりぬ
足音を誘ふ落葉となりしこと
十一月十三日 綿業倶楽部
咲き初めて八手の花にある主張
体調に心して冬迎へけり
時雨雲通りし後と気づきけり
時雨れしを知らぬ家居のつづきけり
十一月十四日 清交社

落葉するままにある庭諾へり
大小の落葉の辿り着くところ
神農祭稊女を思ふ日なりとけり
落葉掃き結局元の木阿弥に
しばらくは落葉の庭を染しまむ
寒くなる気配ぐんぐん漲れる
十一月十六日 中国ホトギス同人会

見晴らしのよかりし高き冬ぬくし
千光寺とは落葉坂つき当る
坂登り切れば冬海見ゆる苦
冬海の入江を俯瞰する高さ
邂逅の誰彼と逢ひ冬ぬくし
山上の大冬晴にある油断
十一月十七日 中国ホトギス俳句大会

二日月も快晴約す冬の月
鳩飛ばし冬の蓄薇園とは淋し
福山へ冬の入口なる旅路
十一月十八日 アサヒカルチャー

旅帰り来てなほつづく冬日和
崩れんとして雲早し小六月
冬晴の今日は昨日と又違ふ
十一月十九日 有恒俳句会

物忘れするもめでたし一茶の忌
太陽を時に見せし冬雲
初霜を踏み来し靴といはずとも

初霜に朝の光を置き初めし
十一月十九日 無名会
山眠る人の往来に閑はらず
北窓を塞ぎ旅立つ朝かな
六甲も摩耶もつづめて山眠る
落ちてゆく夕日沈めて山眠る
見るだけとなりたる山の眠りけり
旅帰り山も眠つてをりにけり
北窓を塞ぎ隣を遠くせり
十一月二十日 夏潮旬会

友癒えよ冬暖かき日のつづく
鷹の空とははつきりと言へねども
尾道の紅葉遅れてをりしかな
掃きしとは言へぬ落葉の庭なりし
十一月二十二日 時雨旬会祝賀会四〇〇回

集ひ来て外の寒さを忘れけり
この日來ることを心に励む冬
癒ゆる日を待ち冬ぬくき日を祈り
昨日まで冬暖かき日なりけり
四百回続けこられし冬ぬくし
會員の揃ひしことの冬ぬくし
十一月二十三日 句会と講演の会

冬ぬくしぬくしと油断ありにけり
一昨日の冬暖かき日を忘れ
もう少し生きて行けさう冬ぬくし
十一月二十八日 きさらぎ会

東京の雨の滞在冬めける
雨降れば雨に処す旅冬めきぬ
どこまでも困つて来る山路
はやばやと冬めく旅の装ひに
十一月二十九日 アネモ旬会

快晴を取り戻したる小春かな
気にかかると山眠りの消息冬の雨
風荒るるとも山眠りたまはけり
旅人小春の一日たまはけりし
眠る山三瓶の旅の消息も

廣太郎句帳

廣太郎

令和元年十一月一日「巴虹」巴心集

賀の旅の余韻 淑氣に包まれて
初景色 刻む心のカンパスに
祝ぎ心重ねて 女礼者かな
福沸湯気 に未来を垣間見せ
三ヶ日 新たな 氣力漲らせ
十二月三日 野分會音屋例会
銀祭 散る山の消息 語りつと
輪察 備前山 船 肅々
黄落を掃いて 古利の目覚めゆく
十二月三日 青嵐會音屋例会
朝時 雨湖北の哀風 洗ひ上げ
孫を抱く妻は 還暦七五三
時雨傘 傾け君を 躲しけり
十二月四日 刈谷市民俳句大会
里 吹いて卓に 品格生れけり
桃 吹いて卓に 品格生れけり
卓上 詩心集め 暮の秋
十一月六日 カトリック新聞選者吟
身に入むや 喪服に着替へたる夕べ
十一月六日 NHK文化センター
友 逝きて身に入む朝となりけり
冬 近き音 階奏で 時の鐘
雁來る 山手線を 追ひ抜いて
外苑の紅葉 且散る 昼下り
十一月七日 蕉心會
秋 惜み君を 惜みて 句座淋し
蕉庵の 未枯に 立ち偲ぶこと
冬 支度 偲ぶ心に 始めけり
秋 日濃し 虚しき釣果 明かしゆく
初 鴨の川の 流れに 未だ乗れず
零 戦のやうな 小鳥に 鳩追はれず
秋 天へ早過ぎる 旅立となり
十一月九日 関西ホトトギス同人會 大会
雲 消えて 小春の空の 仕上りぬ
大 緋を 点景として 古都の空
冬 紅葉 日裏日表 染め分けて

寒天と若草山の 触れ合へる
さ 男鹿の 鳴いて 春日野 明け初むる
山 並は 赤く色付き 草山染めて
飛 火野の 小春若草 山染めて
朝 時雨都心の 目覚め 遅々として
十一月十四日 土筆會
大 緋の 都心に 空の 縮みかな
初 霜の 飛んで 名園引き 締まる
大 緋の 飛んで 古利の 静寂かな
十一月十五日 北國文芸選者吟
大 緋の 飛んで 古利の 静寂かな
冬 ぬくし 橋を 渡れば 虚子の里
小 春風 大和 浮びし 日の遠く
神 守の 留守は 雪の町に 人集め
裏 薔薇香の 裏返り たる 利那
丹 精を 名札に 込めて 冬薔薇
十一月十八日 「俳句界」近詠十句
大 芝を 整へ 古利の 庭を 狹めゆく
枯 紅葉 若草 山を 借景に
冬 紅葉 若草 山を 借景に
春 日野の 浴びて 外つ 空を 現にす
小 春日を 浴びて 外つ 空を 現にす
細 虫の 群れて 虚空を 現にす
江 戸といふ 樹輪の 重き 冬紅葉
江 戸には 狭し 都心の 鴨浮寝
山茶花の 散りて 江戸の 世近付ける
江 戸の 風山茶花の 白磨き 上げ
十一月十八日 「あらうみ」近詠
石 露日和とは 山陽に入りて 近詠
小 春日を 弾き返せし 天守閣
冬 木立 天守と 競へ 高き 孤高
冬 薔薇と思へぬ ほどの 華やき
十一月二十一日 前議員會會報掲載
風 や季節の 狭間 埋め ゆく
天 に 赤地に 白置き 冬さうび
風 に 揺れ 赤の主 張や 冬さうび

十一月二十一日 前議員會
風 に 都心の ビルの 躍り出す
二 月の 西の 明けの 静寂 流る川
冬 構して より 白き 富嶽かな
木 の 葉散る 都心に 音の 乾きゆく
忙 しの 葉散る 都心に 音の 乾きゆく
木の 葉散る 都心に 音の 乾きゆく
十一月二十二日 時雨會四百回記念句會
重 ねたる 会の 歴史 百回 冬ぬく
大 緋の 綿の 溶けゆく 空の 青
蒼 天を 掴み 渡す 古利 かな
浅 漬や 古女 房といふ 矜持
十一月二十三日 ホトトギス社句會
二 の 西を出て 大通りて 不 闇に
冬 ぬくし 軋びし 傷の 癒ゆるより
モ ルダウの 冬暖かき コーダ かな
辰 巳葉流て 冬ぬくき 名告 かな
十一月二十四日 青嵐會東京例会
黄 落の 濡れ色といふ 静寂 かな
冬 黄落の 濡れ色といふ 静寂 かな
晚 闇を 塗り込め 灯さ 神の 留守
本 殿は 淡く 灯され 神の 留守
十一月二十四日 野分會東京例会
教 皇の 立たれし 大地 黄落す
刀 匠の 矜持 持し 點描 かな
天 帝の 意に 黄落の 點描 かな
十一月二十六日 カトリック新聞教皇ミサ感想
寒 灯下 教皇ミサといふ 奇跡
十一月二十六日 若水句會
初 時雨 教皇ミサを 彩りて
石 露日和と 三心 の 昂りて
教 皇の 現れし タラップ 初時 雨
祝 福の 声を 濡らして 初時 雨
十一月二十七日 目黒学園句會
茶 の 花や 日差と ありて 受け止めて
初 冬の 教皇ミサといふ 恵み
茶 の 花に 名園といふ 櫛 かな

雑詠 廣太郎 選

梅雨深き虚子の座像と相對す 東京 今井千鶴子

虚子像にいたたく勇氣梅雨の日々 同

とは言へど東京が好き梅雨つづく 同

示寂てふ言葉覚えて朴の花 神戸 千原叡子

生かされて今日人に会ひ立夏かな 同

往診を待つ病床や更衣 同

鉢植の紫陽花にある前うしろ 東京 山田閨子

紫のひと色ならず花菖蒲 同

二の丸の雨に静もる花菖蒲 同

螢火の消えて永遠てふ時間 神戸 和田華凜

涼しきは師のあの一句この一句 同

風鈴の風の足音なりしかな 同

なきがらの星美しき天道虫 東京 大久保白村

夏蒲団ほどの重さの夢を見し 同

梅雨寒は卒寿の敵と身構へる 同

吹き上ぐる風や吉野の余花の谷 長岡 安原 葉

通さるる部屋や網戸の景が待つ 同

曇る日の都心涼しき一人旅 同

目の端の日向動かす蜥蜴かな 香川 湯川 雅

縮みては引摺る力かたつむり 同

中心のずれて頭上に揚花火 同

夏風邪の喉にざらりと海の風 東京 田丸千種

尼寺の尼たくましく水打てり 同

打水をまゐらせ門の道祖神 同

傘開くととき秋雨の音急に 同

あふれ咲く白菊に日の当らざる 同

小鳥の木小鳥の来ないしづかな木 同

鮎釣の巖のごとく水分けて 神戸 山田佳乃

満天の星の近づく浮巢かな 同

子の声のアルトソプラノさくらんぼ 同

夕端居ここが淡路のま正面 同

女王花待てば時計の一つ鳴る 同

職退きし夫がかしづく女王花 同

蛇の衣風の住処となつてをり 同

瑠璃色の風の分身糸とんぼ 同

合歓の花撫でゆく風の子守唄 同

鉄線の大輪風を乗りこなす 龍ヶ崎 今橋眞理子

木洩れ日に色散らばつて額の花 同

昨夜の雨とどめて今朝の沙羅の花 同

汚されし地球の隅に母子草 相模原 木村享史

振り向いて気づかふ素振り道をしへ 同

太陽に晒すが仕置根切虫 同

雑詠句評（十月号より）

滝の上に天へと続く道のあり 神戸 和田華凜

滝の左右には木が生茂っている。滝の真上だけ、ぼつかりと穴が開いたように空が広がっている。下から見上げると、真つ直ぐに落ちて来る滝水の上に真つ直ぐに空が繋がっている。それを作者は天へと続く道と観た。

作者の祖父、後藤比奈夫氏が六月五日に百三歳で逝去された。氏の生前の句に「滝の上に空の蒼さの蒐り来」がある。

余りにも有名な「滝の上に水現れて落ちにけり」は作者の曾祖父後藤夜半氏の句である。（龍雄）

令和二年六月五日に百三歳の天寿を全うされた御祖父様後藤比奈丸様への追悼句であろう。句柄から、曾祖父後藤夜半氏のあの有名な滝の句を彷彿とさせられるが、このお二人を意識した詠み方が、何ともこの俳句という短い詩を雄大な文学と昇華させている。非凡としか言えない。（廣太郎）

夕暮の影が先づ来て白牡丹 熱海 嶋田一步

白色が暮れ色に変化してゆく状態を詩的に伝える。昼間から一変して、白牡丹の妖しげな風情が流れはじめると夕べ。昼間の牡丹と夕べの牡丹の魅力の違いを、影によって伝えようとしている。昼間の牡丹の華やかさが欠けてゆくのを、哀れな風情と思いつつ、どちらの牡丹にも惹かれていたのである。

つつい華やかさばかりに目の行きがちな牡丹だが、別の視線から別の魅力を捉えている。的確な写生による、主張を押し付けられない句の仕上がりには心惹かれる。（雅）

だんだんと白牡丹に夕暮れが迫ってくる。先ず周りの木々や建物の影が、夕日が傾くにつれ伸びてきてだんだん白牡丹に迫り花の白に及ぶのである。純白が影によって微妙な変化をもたらして行く姿が時間的経過とともに見事に叙されて行く。白という色の移り変わりが美しい。（廣太郎）

天地有情

子選

橡咲けば美穂女忌近くなつかしく
 子規保養せし須磨浦へ卯浪寄す
 事務始旧仮名遣確かめて
 火の山の威を鎮めゆく寒の雨
 何事も無きことありがたく涼し
 薫風や在りし日の如縁に椅子
 父の日の贈りものとや子の昇進
 父の日や妻に告げたし子の出世
 麦の秋教師チョークの粉まみれ
 晩年の己つつしみねぢり花
 五月雨の偲ぶ心をつのらせて
 梅雨明の待たれつつ喪に籠りつつ
 供へある仏に柏餅貰ふ
 これからが好きな季節よ更衣
 たましひの蛩となつて会ひに来よ
 梅雨空へ天衣纏ひて旅立ちぬ
 水打てば何か言ひたげ比奈夫句碑
 タづけば妖しく光り蛩川

神戸 千原叡子
 同 稲畑廣太郎
 東京 同
 長岡 安原 葉
 同 同
 東京 河野昭彦
 同 同
 熊本 岩岡中正
 同 同
 神戸 三村純也
 同 同
 相模原 木村享史
 同 同
 神戸 和田華凜
 同 同
 鎌倉 星野 椿
 同 同

しみじみと涼しさまとふ外出かな
 老いてなほ氣力みなぎる夏帽子
 月下美人今宵開くと告げくれし
 あ无路地にまだお住まひか釣葱
 雨止んで一陣の風薫るなり
 晴々と人參木の花盛り
 青春の友の忌日よ紫陽花よ
 梅雨深き家のどこかで犬吠ゆる
 大虚子の幻とある薫風裡
 梅雨に入る句に光明を求むるや
 緑蔭を抜け緑蔭へ車椅子
 爪先の心もとなき梅雨の冷
 初花に一人氣付きて皆氣付く
 あたたかや心は旅の空にあり
 自肅とけ心安らぐさくらんぼ
 降る暗さ曇る暗さの五月闇
 沙羅の咲き継ぎて近づく三回忌
 短命を惜しみきれざる沙羅の花

福知山 松山ひとし
 同 同
 神戸 山西商平
 同 同
 芦屋 黒川悦子
 同 同
 東京 今井千鶴子
 同 同
 神戸 浜崎素粒子
 同 同
 東京 山田閨子
 同 同
 横浜 小川龍雄
 同 同
 宇治 西村やすし
 同 同
 西宮 本郷桂子
 同 同